

## 前までのあらすじ

流遠るしおやみひめは、小学六年生の普通の女の子。  
学校があつて、友達がいて、好きな男の子がいる。

しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまう。

少女の名はツバキ・タカチホ。

彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。

ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅せんめつであり、彼女はそのための存在——〈機獣少女きじゆう〉だった。

〈カタストロ〉を殲滅せんめつし、ツバキは故郷の惑星ゼヘナに帰り、やみひめは以前のように普通の生活に戻れると思っていた。

しかし世界は改変され、やみひめと橘アサトたちほな、そして友人のクラウ・P・ブランはゼヘナに転移してしまう。彼等はゼヘナを危機に陥おとしれている別の敵性体——〈ブレケース〉の存在を知り、その打倒に協力する事となった。

しかし状況は推移し、〈ブレケース〉は姿を潜め、入れ替わるように新たな脅威が現れた。機獣を思わせる特徴を備えた、蠍さそりの姿を模したそれは群れを成し、やみひめ達の滞在するオオミヤ・シテイを蹂躪した。

一方、〈エリアD〉に向かったファフロウ姉妹と、密航していたキリエは行方不明となり、同行者である機獣少女のアイナとルイゼは姿を現した蠍の群れによって窮地に陥るが、上空を飛行していた飛行型機獣少女、ロゼとヴィオレによって救われる。

そんな中、オオミヤ・シテイの街で蠍と遭遇したアサトとツバキ、カナコ達は〈L.C.ファクトリー〉に戻っていた。地球からの転移メンバーが身を寄せている場所である。そこでツバキとカナコは、アサトから地球で起きた世界改変の事実と、やみひめが精神的に不安定である事を告げられる。

カナコとツバキの胸中を知らず、その後アサトは一人、やみひめの元へ向かうのだった。

※登場人物紹介は[こちら](#)

機獣少女ゾイカルやみひめ *The NOVEL REVIVAL*

〈L・C・ファクトリー〉の談話室。

普段は勤務している従業員達の憩いの場として開放されている部屋だが、現在は最高責任者であるロゼット・コダールの厚意により、地球からの転移者と、その関係者達の拠点として提供されている。

奥には簡易な調理場があり、部屋の中央には長方形のテーブルと、それをぐるりと囲むソファが配置されている。標準的な体型の成人男性であれば、十人は座れるだろうスペースに、今は二人の少女だけが並んで座っていた。

一人は流遠やみひめ。

地球から転移現象によって惑星ゼヘナに来た、十二歳の小学六年生。長い黒髪を結ったポニーテール。ツリ目だが攻撃的ではない、琥珀のような橙色の瞳。身長や体格は標準的な小学六年生のそれで、小柄で幼さが色濃く残っているが、その可愛らしい容貌からは十分に将来性が期待出来る。

彼女に寄り添うように隣に座るのはクラウ・P・ブラン。

同じく地球から来た少女なのだが、高校生くらいに見える容姿に反して、まだ小学六年生だったりする。そう、やみひめと同じ年——同級生にしてクラスメイトである。長い黒髪の一部には白いメッシュが入っており、真紅の瞳と相まってパンキッシュな印象を見る者に与えがちだが、当人は至っておとなしく控えめな性格をしている。すらりと伸びた手足と、メリハリのある体型、整った容姿、更に大人びた雰囲気から、同年代には憧れの眼差しを向けられる事が多いだろうが、彼女自身はコンプレックスに感じているらしい。

やみひめとクラウ、二人がゼヘナに来て、まだ一日しか経っていない。ようやく二十四時間が経過したくらいのはずだ。それにも関わらず、その間の出来事が大きすぎる。

突然の別の星への転移。其処が知っている星——ツバキ・タカチホの故郷——という、ありえない偶然。

クラウのMBデバイス——後に〈ラインハイト〉と命名——起動試験時の暴走。それに伴う戦闘。

唐突な〈プレケース〉の撤退行動と、それに起因する新たな脅威の可能性の示唆。実際に現れた、機獣を思わせる蠍のような姿をした、群れをなす敵性体。

更に、彼女等の転移の前には、地球で『世界改変』と呼ぶべき現象もあったと聞く。

地球から来た二人の少女。

並んでいると歳の離れた姉妹のように見えるが、実際には同年で、クラスメイトで、親友で、命のやり取りをした——今は〈機獣少女〉同士。

だが、二人が戦った事実は世界改変によって『なかった事』にされた。覚えているのは

本人達と、一連の事件の当事者であるゼーナの少女・ツバキ、そして同じく事件の中心にいた地球の少年・橘アサトだけらしい。どちらの星からも異邦人であるファフロウ姉妹も地球での決戦の場にはいたらしいが、これは立場的に例外と考えるべきだろう。

共有出来る秘密や悩みがあると、人は結束が強くなる。それは時として依存になるが、それもまた信頼の一つの形だろうと、並んで座る二人の少女を見てロゼットは思った。

ロゼット・コダール。

長い金髪と青い瞳の美女なのだが、朗らかな雰囲気のためか、美人にありがちな近寄りたさを微塵も感じさせない。此処（L.C.ファクトリー）の創始者の名を襲名した才媛だとか、稀代の技術者であるとか、そういう才気走った雰囲気もなく、ただただ穏やかな印象を見る者に与える娘だ。

ちなみに、大学生くらいに見えるが実際には三十二歳である。

「やあ、お待たせ」

ようやく淹れられたコーヒーマグカップを、ロゼットは苦笑交じりにトレイからテーブルに移す。普段は従業員の誰かが淹れてくれるので、自分で用意したのは久々だった。

「ありがとう、ロゼット」

笑顔を浮かべ、やみひめが感謝の言葉をくれる。先ほどまでの様子と比べれば雲泥の差だが、やはり無理をしている感は否めない。

「ごめんね、タオエンみたいに手際良く出来なくて」

ファフロウ姉妹の姉の方は、無表情でクールな雰囲気にして、プロの如く給仕をこなしていた。どちらかといえば給仕される側のイメージなので意外ではある。

「ううん。ロゼット、忙しいのに……」

謙遜するロゼットに、今度はクラウドが申し訳なきような顔をした。早熟な外見と同じく、精神的にも大人びている彼女だが、その子供らしくない他人への気遣いや、自罰的な傾向を見ていると、少し心配になる時がある。

「ツバキやカナコもそうだけど、やみ子ちゃんとクラウドもそう。大人びてるよね」

少し嘆息気味にロゼットが呟くと、眼前の少女二人はきよとんとした。

ちなみに、『やみ子』というのはアサトが使っている呼称で、ファフロウ姉妹に便乗する形でロゼットも使っている。

「え……私も？」

「そう。普段は普通の小学生っぽいけど、時々、すごく……なんていうのかな、何か抱えているような表情をしている」

ロゼットの返答に、やみひめは自覚があるのか、「あはは……」と苦笑で誤魔化した。

「クラウは言わなくても、自覚してるよね? ——ああ、見た目がつて意味じゃないからね。性格がつていう意味だよ」

「……………」

責められている訳じゃない。かといって褒められている訳でもない。クラウが反応に困るのは仕方ないだろう。

「ツバキとカナコは、少しだけ普通と違った環境で育ったせいもあると思うけど、子供が子供らしくいられないのは、大人のせいなんだ。大人がちゃんと大人をやらなから、子供が子供でいられない」

ふと自分を省みる。自分にそれを言う資格があるだろうか。

「私は物心ついた時から機械全般に興味があつて、自然と技術系の道に進んで、当たり前みたいに技術者になつたんだ。好きな事だつたから、努力はしたけど大変だつた記憶もなくて、きつと周りからは順風満帆な人生に思われてて、私も多分そうなんだと思う」

それでも——

「だから、大変な思いをしてきた子に、こんな事を言う資格なんてないかもしれないけど——子供でいられるうちは、子供でいいんだよ」

嫌でもいつかは大人になる。子供が子供でいられる権利を、大人が奪つのは理不尽だ。

ただでさえ、このゼヘナでは年端もいかなない少女達に戦う役目を強いている。機獣少女システムによる安全と、負担のかからないローテーション制やマネージメントといった管理体制、そして限りなくアイドルに近い認識を民衆に与える事で、彼女等の存在は非難される事なく存続しているが、それでも、子供を戦わせている事実は変わらない。

こんな事が日常化しているのは異常なのだ。

「私は自分が大人だなんて思つてないけど、社会的にはやっぱり大人だから、あなた達みたいな子供を見ると、すごく情けない気持ちになるんだ」

やみひめとクラウは地球人だ。彼女等がどんな環境で暮らしているかは知らないし、ひよつとしたらとても幸せな生活を送っているのかもしれない。それでも、今こうして目の前にいる二人の少女は、庇護すべき子供に見える。

「ごめんね、べらべら勝手な事ばかり言つて。余計なお世話だよ」

それでも——

「それでも言わせて。私には気なんて遣わなくていいし、私でよければ、いくらでも頼つてくれていいからね」

——と、最後まで言いたい事を言い切つてから、ロゼットは自分の発言に恥ずかしくなつた。そんな柄ではないし、身の丈に合つていない人間が言つても、聞く者の心には響

かないだろう。

「えっと……じゃあ、私はそろそろ——」

いたたまれなくなり、ロゼットは談話室を出ようと思った。『レケース』襲来によって通常業務は止まっているが、それによって発生した案件はいくらでもある。立场上許され<sup>ゆる</sup>ているが、本来は他にやるべき事がいくらでもあるのだ。

少し頭を冷やそう。

目を通しておかなければならない、承認印待ちの書類もあつたはずだ。こればかりは最高責任者であるロゼット以外には任せられない。

『——あの！』

ロゼットの背中に二人の少女の声が掛けられた。ほぼ同時に。

振り返ると、やみひめとクラウドは顔を見合わせ、

「あ、やみひめから……」

「ううん、クラウドが言って。多分、同じ事を思ってるから」

控えめな性格のクラウドは友人に先を譲<sup>ゆず</sup>ろうとしたが、やみひめはにこやかに、そして明確に辞退した。これだけで二人の付き合いの長さが見て取れる。はっきりと言わなければクラウドは遠慮してしまう。クラウドもそれが、やみひめなりの配慮なのだと理解している。

「本当に仲が良いんだね」

ロゼットの言葉に、二人は照れくさそうに笑った。きっと地球でも、こんな風に日々を送っているのだらうと、微笑<sup>ほほえ</sup>ましい気持ちになる。

「あのね、この星に来て、ロゼットにはずっと助けられてる。目を覚ました時にロゼットがいて、優しくしてもらって、今もこうして気にかけてくれて、すごく感謝してる。だから、えっと……」

クラウドが一生懸命に自分の気持ちを伝えようとしてくれるのが判る。大人びた容姿で、冷静な口調で、テンパった様子<sup>みじん</sup>など微塵もないのに、不思議と小さな子供が足りない語彙<sup>ごい</sup>力でがんばっているようなイメージが、ロゼットの脳裏に浮かんだ。

「うん、なあに？」

もうクラウドの気持ちは十分に伝わった。それでも、彼女の可愛らしい様子をもっと見てみたいという、ちよっとした悪戯<sup>いたずら</sup>心がロゼットにそんな台詞<sup>せりふ</sup>を言わせた。

「えっ!? あ、だから……」

「がんばって、クラウド！」

顔を真っ赤にするクラウドに、やみひめが声援<sup>エール</sup>を送る。ひよっとしたらロゼットの意図に気付いているのではないかと思っただ、それは邪推<sup>じゃすい</sup>だろう。

「ふふっ、ごめんごめん。もう充分に伝わったよ」

これ以上は意地悪だろうと思ひ、ロゼットは二人の方に歩み寄った。

「ありがとう、クラウ。やみ子ちゃんも」

テーブルがあるため、ロゼットはソファの背後に回り、彼女を振り返る姿勢の二人の少女を、左右からそれぞれの腕で抱き締めた。

温かい。

子供の体温は高いというが、こんなにもはっきり伝わるものなのだと、ロゼットは愛おしい気持ちと共に感じていた。

「ロゼット……やっぱり、お母さんみたい——」

腕の中で、クラウがぼつりと言った。思わず言ってしまったといった様子で、本人ははつと口を開きしてしまったが、もう聞いてしまった。

「……あはは。そうだよ。もう三十二だもんね。お姉さんより、お母さんだよ」

「ち、違うよ!?! そんなつもりで言ったんじゃないよ!」

ロゼットの自虐的な発言に対し、クラウは今度こそはっきりとテンパってフォローの言葉を重ねた。

もちろん、これもテンパるクラウの反応が見たくて言っただけで、ロゼットは年齢の事など微塵も、少しも、まったく、これっぽっちも気になどしていない。

断言しよう——気になどしていないのだ。

第二十八話

『オモイオモワレ』

ロゼットが談話室を後にして、束の間、しんとした静寂が訪れた。

一般的に無言というのは気まずいものだが、そう感じるかどうかというのも、関係性の一つの判断基準と言えるだろう。少なくとも、クラウはやみひめと一緒にいて、無言でいる事を気まずいと感じる事はあまりない。

ロゼットがアサト達の無事を伝えに来てくれるまでの無言は、さすがに気まずかったが。いや、気まずいという表現は適当ではない。いたたまれなかった。

クラウのMBデバイス〈ラインハイト〉のテストのため、やみひめと模擬戦を行い、その終了後に事件が起きた。市街地を襲った謎の光線と、直後に現れた正体不明存在アンノウンによる被害。同時刻に、アサトはツバキとカナコと共に現地に出かけており、巻き込まれているのではないかと心配するのは当然だろう。

ただ、事件の報を聞いた時の、やみひめの反応は尋常ではなかった。膝かひから崩れ、立っている事もままならず、身体からだを震わせ、一種のパニック状態を引き起こしていた。クラウの知るやみひめなら、咄嗟とつさに飛び出し、現場に向かおうとしただろう。それが正しい行動かどうかはさておき、友人の思いもしない反応に、クラウもまた動揺してしまった。ひとまず彼女を支えてソファに座らせ、あとは震える身体を抱き締める事しか出来なかった。もう、あの時の事は思い返したくない。あんな痛ましい友人の姿など。

ロゼットが談話室に来て、アサト達が無事に〈L.C. ファクトリー〉へ向かっている事を報せてくれて、ようやくやみひめは落ち着きを取り戻したのだ。

ロゼットが淹いれてくれたコーヒーが湯気を燻くもらせるのを、ぼんやりと眺ながめていると、左隣に座っているやみひめが、ぽつりと呟つぶやいた。

「びっくりさせちゃったよね」

「……うん」

パニック状態の事だろうと理解し、クラウは少しだけ返答に悩んだが、素直に頷うなづいた。誤魔化しても仕方がないし、彼女もそんな事を期待してはいないだろう。

「世界改変が起きた時にもああなって、ずっとアサトと一緒にいてくれて」

クラウもまた、世界改変によってすべてを忘れていた。〈カタストロフ〉に意識を奪われ、担任教師であり、クラウの想い人でもある神かみじょう議ハンに好意を寄せていた女性に傷を負わせ、他にも多くの人間を傷付け、友人であるやみひめを一度は死に至らしめた——それらの事実を。

この星・惑星ゼヘナに転移する直前、やみひめがアサトの家に泊まっていると聞かされて、あらぬ想像をしてしまったが、すべて合点がてんがいった。

「あの状態のやみひめを見て、ようやく判った。本当に大変だったんだって。それなのに、

私は何も憶えてなくて、さつきも何も出来なくて……ごめんなさい」

やみひめは謝ってほしいなんて思っていない。判ってはいても、謝らずにはいられなかった。

「うん、許すよ」

苦笑気味にやみひめが言う。彼女はきつと気にしていない。だけど、それだとクラウドが自分を許せないと知っているから。ゼーナに来て、世界改変で失われた——『なかった事』にされた記憶を取り戻した時も、やみひめは同じ事を言ってくれた。

「それと——ありがとう」

「え……？」

何に対する感謝なのか判らず、クラウドは戸惑った。

「さつきの事」

やみひめがパニック状態になった際、クラウドは何も出来なかった。ただ、震える友人の身体を抱き締めていただけ。

「何も出来なかったってクラウドは言うけど、そんな事ないよ。すごく心強かった。もしあの時、一人だったらと思うと……怖いよ」

一瞬、やみひめの表情が不安で曇った。

本当に怖いのだろう。

大切な想い出が、なかった事にされてしまう恐怖。彼女はそれを経験している。

ツバキと出会い、〈カタストロ〉に意識を奪われたクラウドと戦った、一週間ほどの日々がなかった事にされてしまった。それは大多数にとっては喜ばしい事で、クラウドにとっても同じはずだ。

だが、そんな風には割り切れない。

クラウドもまた、それで罪の意識を消す事など出来ない。なかった事になっても、覚えているのだ。他人を傷付けた時の感触を、痛みと恐怖に震える被害者の悲鳴を。

クラウドが忘れていた間も、やみひめは恐怖に震えていた。

それを支えてくれた唯一の人を失うかもしれない恐怖は、それ以上だろう。

大切な人を失ってしまうかもしれない恐怖。

クラウドもまた、同じ恐怖によって過ちを犯してしまった……。

「だから、ありがとう。一緒に来てくれて、クラウドにとっては迷惑だと思うけど、私はすごく心強いよ」

やみひめはクラウドの左手に自分の右手を重ね、微笑んだ。

転移の直前の事は覚えている。世界改変で失った記憶が戻り、ひどい不調に襲われた。

救いを求めた手に、駆け付けてくれたやみひめが手を伸ばして——視界が光に包まれた。どういった方が働いたのかは判らない。ひよっとしたらクラウは、やみひめの転移に巻き込まれただけなのかもしれない。

だとしても——

「感謝するのは私の方。償<sup>つぐな</sup>う機会をもらえたんだから」

『犯した罪は消せない。しかし、贖<sup>しよぐん</sup>罪は可能だ』——ゼーナで目覚めた直後、罪の意識で押し潰されそうになっていたクラウに、やみひめが教えてくれた言葉だ。とある人物の受け売りだそうだが。

「それに、やみひめの助けになれるなら、私も嬉しい」

左手の中指で鈍い輝きを放つ黒曜石を思わせる指輪<sup>リング</sup>——待機状態<sup>モード</sup>のMBデバイス（ライオンハイト）をクラウが翳<sup>かざ</sup>す。

「今度は一緒に戦えるよ」

敵としてではなく、味方として。

（カタストロ）に意識を奪われていた時のようなまがいの<sup>まがいの</sup>ものでなく、同じ（機獣少女）として。

「クラウ……」

「うん」

言葉にならない様子の友人に、クラウはただ頷<sup>うなず</sup>いた。

言葉にしなくては伝わらない事がある。けど、言葉にしなくても伝わる事だってある。表情を見れば充分だ。

それだけで、やみひめの気持ちはクラウに伝わっていた。



ロゼットを訪ねて彼女の執務室のドアを開くと、カナコとツバキは救世主かのように迎えられた。書類の処理をしていたようだが、彼女にとっては相当な苦痛だったらしい。

「無事で良かったよ。……あれ？ アサト君は？」

三人で出かけたうちの一人がいらない事に気付き、ロゼットは首を傾<sup>かし</sup>げた。

「橘<sup>たちほな</sup>さんは談話室に行ってるわ」

答えたのは年長の少女——カナコ・T・シングウジだ。

十七歳の高校二年生。

長い黒髪のサイドを切りそろえた、『姫カット』と呼ばれる独特の髪型。これが本当の意

味で似合うのは、本物の美人だけであり、それが似合っているカナコは、まさに美少女と呼ぶに相応しい容姿の持ち主だった。

ロゼットを見つめる黒い瞳は黒瑪瑙を思わせ、普段と変わらぬ静謐な色を湛えている。

「そっか……うん、正しい判断だ」

「あの、やみひめさんの様子は……」

納得した様子のロゼットに、今度は年少の少女が口を開いた。

ツバキ・タカチホ。

十一歳の小学五年生。

セミロングの黒髪を左側で結ったサイドポニー。穏やかな色を湛えた蒼玉のような青い瞳。年齢通りの小柄な容姿に反して、性格はかなり達観している。可愛らしく幼い外見との差異に、背徳的な魅力を感じる者は多い。

「……正直、驚いたよ。あなた達——って言わなくてもいいか。アサト君が余程心配だったんだらうね。街が大変な事になってるって聞いて、パニック状態になってた」

「……そんな」

「……………」

覚悟はしていたつもりだったが、ツバキはショックを隠せなかった。カナコは無表情を変えなかったが、それでも思うところはあるのか無言を貫いた。

「無事だよって伝えてからは、だいぶ落ち着いたらけどね。今はクラウドが付いててくれてる」

「そうですか……」

ひとまずは大丈夫だと自分を納得させ、ツバキは質問を終えた。

「それじゃあ——休憩がてら、お茶にしようか？ 街であつた事も聞きたいし」

雰囲気を変えようと、ロゼットが明るい口調で言った。

そして——

「——アニス、いいかな？」

ロゼットが言うと、カナコとツバキは自分達以外の存在に初めて気付き、はっと壁際に佇む娘に視線を向けた。

前をまつすぐに切りそろえた、長い黒髪。すべてを見通すかのような紫眼。同じ黒髪でも、カナコやツバキとは違う、古風というか、ある種の風格を感じさせる。

今は普通に事務職に適したスーツを着用しているが、もっと別の——例えば、東方大陸の民族衣装の一つである上衣下裳が似合いそうな雰囲気を感じている。

状況から察するに、ロゼットの秘書のような立場なのだろうか。

「……………はあ——」

アニスと呼ばれた娘は、やれやれといった様子で溜息を吐くと、それ以上は何も言わずに執務室を出た。

「変わった雰囲気の娘ね」

「失礼ですよ、カナコさん。年上の方に向かって……」

「え？ 私と同年代くらいに見えたけど」

「私には二十代くらいに見えましたが」

カナコとツバキの視線が同時にロゼットに向くが、彼女は『追究しないで』とばかりに苦笑を浮かべるだけだった。



橘アサト。十八歳の高校三年生。

男性にしては長めの黒髪と、年齢に見合わぬ気怠い雰囲気が特徴だが、それ以外に目立った点は見当たらない。地球からの転移者という立場だが、同じ境遇である二人の少女のような力もない、極めて平凡な存在である。

彼は今——逡巡していた。

談話室のドアの前で、自分の帰りを待っているであろう少女に対し、どう接するべきか。恐らくは不安で怯えているはずだ。その場合、どう対処すればいい？ 抱き締めるのか？ 優しい言葉をかけるのか？ どちらも彼には非常にハードルが高い。相手が小学生とはいえ、十二歳というのは子供扱いしていい年齢なのか？ クラウだって十二歳だし、ツバキに至っては十一歳だ。こんなにも同年代で幅があるのでは、参考にならない。

「……………」

五分ほど立ち尽くし——アサトは考えるのをやめた。

友人のクラウと一緒にいるのだ、案外、けろっとしているかもしれない。

(やみ子だしな)

難しく考える必要はない。これまで通りに接すればいい。

談話室のドアをノックし、許しを得て入室する。答えたのはクラウだった。やはり傍らそばにいてくれていたらしい。

談話室に入ると、ソファに並んで座る少女が二人。

背の高い方がクラウ。高校生くらいにしか見えないが、やみひめと並んで下校する姿を見た事がある。彼女がランドセルを背負っている光景はなんというか……コメントしづらい。

その隣にちよこんと座るポニーテールの少女。何もかもが標準的な小学六年生のそれで、可愛らしい容姿だが、特筆すべき点は見当たらない。

やみひめだ。

すでに見慣れた少女のはずなのだが——アサトは彼女から目が離せなかった。

琥珀アンバーのような橙だいだい色の瞳に大粒の涙を浮かべ、やみひめは表情に笑みを浮かべて泣いていた。

「え!? どうしたの、やみひめ……!?!」

急な事だったのだろう。友人の様子に、クラウは動揺を隠せないでいた。

「——っ!」

元より、そのつもりだった。出たとこ勝負で思ったように行動するつもりだった。

アサトはただ、身体からだが動くのに任せただけ。

差し出された小さな手を握り、そっと引き寄せ——小さな身体を抱き締めた。

本当に小さい。

アサトは体格が良い方ではないが、それでも十二歳の少女というのはこんなにも小さく、儂はかないものなのかと、改めて思った。

地球で世界改変が起きた事を認識した直後、恐慌状態になったやみひめを、こうして抱き締めた。三日間、ほとんど離れず傍そばにいた。彼女がどれだけ小さく、弱い存在なのか、知ったはずだった——いや、それ以前から知っていた。

(出逢であったきっかけは何だった?)

今年の夏、公園でやみひめの強姦未遂事件に居合わせた事だ。

行方不明になった妹と重なった。妹もこんな目に遭ったんじゃないかと腹が立った。

結果、やみひめは無事で済み、犯人はその場で取り押さえられた。

事件後にアサトは彼女と再会して、今日まで関係は続いている。

(何のためだ?)

それはきつと——

「良かったよう……アサト、ちゃんと帰ってきたあ……」

「……あんなボディガードが二人いて駄目だったら、街ごと全滅してるよ」

別に護衛の名目でいた訳ではないが、実際、カナコ一人で蠍さそりの化物は駆逐で出来た。ツバキも直掩ちよくんに付いてくれていたので、死ぬような目には、そうそう遭わなかっただろう。

「そうだけお……う、ひつく……心配だったんだからあ……っ」

「そっか……ごめんな、心配させて」

視界の端はしで、クラウが会釈えしやくするのが見えた。気を遣ってくれたのか、無言で部屋を出

て、わざわざ音を立てないようにドアを閉めていった。

(……まあ、クラウなら事情を知ってる訳だし——いや、やっぱり気まずい)

どう言い訳したところで、やはり高校生の男が小学生の女の子を抱き締めているのは、

絵面的えつらに問題があるだろう。完全に事案だ。

(とはいえ、いつまでも子供のままだやないんだよな。こいつ、あの時みたいな感じに成長するのか……?)

地球でツバキから連絡を受けて、二人の事情を知った時、やみひめは今のアサトと同年代くらいの姿になっていた。中身が何も変わっていなかったので意識せずに済んだが、正直、美少女だとは思っていた。

「光源氏も、こういう気分だったのかね……」

年端としはもいかない幼女を自分好みの女性に育て上げ、他にも何人もの女性と浮名うきなを流した稀代きだいの色男プレイボーイ。

「……………」

アサトの眩つふやきが聞き取れなかったのか、やみひめが小首を傾げている。

「……………なんでもなく」

腕の中の少女が、間近で自分を見上げ、涙目できよとんとする表情は、なかなかくもくものがある。ロリコンとか、そういう事ではなく。

「……………」

無言で少女を抱く腕に力を込める。より密着する事で、自然とやみひめの顔が隠れ、表情が見えなくなる。

「もう、苦しいよお……えへへ」

文句を言うが口先だけで、見えなくとも彼女がどんな顔をしているかは想像がつく。

「……………はあ」

もう認めてしまってもいいのかもしれない。

橘たちばな アサトにとって、流遠るとおやみひめという少女は、間違いなく特別な存在なのだ。

それが恋愛感情たぐいの類たぐいなのかどうかは、彼自身にもまだ判らなかつたが。

## あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL』第二十八話をお届け致します。

間に挟んだ閑話を除けば、二ヶ月ぶりとなります。すっかり夏の暑さも鳴りを潜め——  
てません。宮崎はやや暑いです。まだ扇風機が必須です。

今回、とにかく書き始めるのに時間がかかりました。丸一ヶ月も小説の事を忘れて遊び呆けると、このざまです。やっぱり、ペースを守るのって大事。

本編の話をすると、やみ子が四か月ぶりの登場です。主人公なのに……でも今回はヒロインぽかったはず！ ロリっ娘をぎゅってしたい！

取り乱してはいません、本心です。

ほら、小学生って最高じゃないですか？

これ以上馬鹿な事を口走る前に、謝辞で締めたいと思います。

まずはチェックをしてくださっている紙白さんに感謝を。クラウは元より、ロゼットも作品に欠かせないキャラとなりました。今回新たに登場したアニスちゃんについても、展開させていきたい所存なので、引き続きよろしく願います。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。

本作は自分なりに可愛い小学生を描く事を目標の一つに掲げているので、是非とも小学生に関するご意見も送ってください。

いや、本当に。

2017 / 10 / 12 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第2部』小説ページに戻る